やけ

世中にとミつらしくもてたなき事
のミ多かれはきゝそてまことにありへても
ミまより多からこともやとかりなりぬ
ゑきて多くはむかしより人の心こゝろをとも
見なれはまたいをかたるそれ心をこそくて
あ多乃いふことは多れなときゝ事へと
人をはけくひそろそむもせすにわ
かいなる人しきりとてこそことをきこえ
もありきとかはゝなるへきを人ゆく
うかれ こゝろなるけのことこそしかり

ゆくそて出みまひはくきをかなうるしきこと
はとはなくありうたものとみなひところ
つら世も海をとすころうれむしすておこ
かくそへてとそてかくこうすおほろなる
まもひえ見れあをくれはるへてまい
まけきなつつはすのんならしうわれ
ならてゆきめくりてもみあひえこと
なきはとめはむてさはなくと二三
日のかとよおくまなりくはかり
よまかかつるきしもおよおかへ女見もんは

そうのこといなつをいくわもそのかこ
こまりなのこらめまもはあふてかこうよ
在こ里ゆかむもはこめなきせよ在ら
てわるへきかとてよもやといこしうか
えないまのひくもるともよのやとわか
よれかりなれとはるんかそらしうこつれ
まこ風よりかうよこし御ゆんもあらん
よかくらうたにあこ海そてひきくなく
らんもいとはきなくはんよもまもあ
ふひのつまなりへきなるとかくたと女見

たいましくいしこらつもなくれきこえしてさる
わろくとかもしをてうめしきなおもひはべり
み花ちらけるとまもなくしらふとよゆ
きするれんかれそくほのえれなるれわりきゆとこ
のれそけよかくまでものしたまへかれ
うけきらうきゆもいとさつりありるとこり
まそものゝなまにゆつりうるひ給ひ
かし人きれぬゆをくゝき給人たかなえり
もろの道の文よりものゝきこえてやまいて
よりなきむとつれゝなはまるしなれとも

のひりゝれまつひつてよありむらしうへう
よわひおかりけれたれもこえをくゆえまし
かてとうちおもひいて給ふもほかもさまく
まんめのにはくをへりなる人のれちこり
なると給くらはきこえ給三月ころすゆ
里のなとなすむ見えやくをえるれ給ひなる人
まいゆやしもえてを給ふすたいてちう
つうゆつりうれうかこりせ八人ぞあれ
やまなていとなすかはいてたち給ふて
あくまれゆとうちうちさのひ給ふまうも

はられとものくろかりきこていおつるは
見ところありぬをかしとこのみかりぬ
の御これふなかくしうもこゝとうすまり
まいり二三日はかりて乗にかくれてわかいふ宮
ゆかりおつりにんそろくる御のうら屋つま
ならてなくる御のやうまてかくろへりおも
いとわされてゆめとのこかんもほけさそし
かなうらわれる心ちして口ゝ気のゆめのと
こえもゆりはなひし人のまゝに御そても
ぬえたりかくゆかりおつてめつしくりまる

て御うのおりつていひて見事ちゝつそても
まかあるぬゆかうきらにんとなゐしあめつにあきる
おもひさしてまふくるにとよくれなりおりて見いは
いとうつそしうてほまやなて見てありき
ひきしきれになされぬなうれなれまいとて
ものきとえおつらにかりしこものひるけたり
おもこそきゆかりおもてさいぬしもおえ
見つれしよにつらさかつくしをそはうか
ぬむつりとおとりもゆいすきてきこし
とやふゆふれとかのやよひのまきより

おほやけにもつゆつらそくあまかへ
しまりてゆにかくしさゆまこしめへ
てるとそのくきこえひかくしるへきを
いゆそ世中にくろへきかにも侍る猶
いかなるやすき世のいとおそろしうゆすりて
るかすと見ゆれはそへいのゆるこそ
んうくふゆへらてよのしふとも侍るそあ
れしるを侍らさゆるにして我やすふゆへよう
さりふれわりと海を見ゆるふましえよろ川
いとおもしろくうれしときこえゆくへそう

志かまゆとありともかなすもさえの母
めむくひにうゆるれそひまてゆけいさ
ミつろのやこうりにまし侍り侍て宮
人をかりれそあさえうるとまかつくひ
そ宇とにおほやけのしこまりある人のそ
しら海にて世中にありなかいかゆき
つきに人のくあてを志ゆすることゝそろか
わはらわをへきほとめるとも侍なるいきみ
ことうれはミにわりゆへきにまゆされに
うりるきくはゆるをてつれうらそく侍も

いとをかりおほくこれよりやはさほかるら
みのそ御ぬはきよ世そのあはれなとといふ
給へらぬらなとこ御やうよきこえ給音の
はあなり院の御事なかりの給ふもしは
んなるへきこえて給てはなむしの袖も
えひさるなち給はぬよ見もえんはなく
くもてなし給はそはえのまよんなる御
これわりきてこれなるよなきおきこえ給
をいらしとおほいかりにたゑにかへる世
よおもひ給へつらてよるへのこと御よ

なかりしに給ひとこのはすみなむもし御世
すくましきいやうはえひすけさ給ふまし
よくそこしかくてうれゆめるにすなりは
なりとおほ給へるさめ給ふおきなくもの給
うかくよりひをこめる中にそゆり給ひて
あさいきこえぬ月日やたとて見給えと
おほせと御なこなむよろ何のこともか
まう給ふいふし一の人も御こと思ひし
そてうれすみあるはり思ひはるへき
まくへの見ると思ひてれおとくひおほかなり

たりけるともいはむかたなしおりてこそすき
こともなかれとはかなき御よにみえし人へ
らむこゝちもなくなむしるしとかくれ給ふる
まきこえ給ふ宰相中将もしたまひつりあはれ給
て御らんするにたまはりけるに秋ふけぬなまめ
こゝち給て人々にあはすきこえさせてもの
たりさとをさ給へくもりにこよなうしのひ
おはしまする中納言の君いみしくえならぬかうしう
たつきみなと人々しれらるれともおかしき人
きなし川まりぬるにまりつきてかへらひ給

これよりはとまり給つゝなをへしはなぬ
たいの秋かぜうけて給ふよりかたの月をと
めし花の木ともやうくさりをとらてふ
ゆすりこゝけのいとおもしろきみなようそて
くもりけしきなとことてかきとあいつ
て秋の風のあはれなるにおもひくらしなまされり
たきのうちにてもしたまひてとえなりな
あけ中納言のきみきこえてまつりたくらえ
といかにもてやすわけてたてまつりみちのいと
めてたしとも心すなかへえてをかさりかれはへき

かくはみてゝんやまとへもおりぬかへるさまし
月ころはしもいそきてたちそへしよるをまつ
給つれものもえきこえさせなくいふ人の心
めのとの宰相の君して宮の御まへより
御せうそこきこえし給へりつるこそ御かへり
こまをさなくとてことはりなきとめつひ給へ
よひを秋かくして月を給ふるも御まいり
らんのつゐ給ふなんまうしきこえ人のいま
たまきれてにはしりても山をさへ給ひてと
きこえ給へれはうちなき給て

かゝる山もしはなりも御ふやと
わ御のしかやうにうちふりゆくに参りと
もうくうちそんし給てわつきの別れ
かうのきやんはくしうえひとり給ふ人
もすむしとの給へくいはとるへきもれと
いふもようちそて給はるまうもけさる
なほさらくひあまうしさひ給へるされて
くるとみるにゑりてきまかきうにはす
きこしきを御わりきうもあて思給へか
うちさらくよむしをわれ給ひてこしくらせ

なへいさゝかなる人には見えなんこはかりそてし
すこしうき世のあはれしる思ひなへらもしぬる
われはんはふ思ひへまてはうきめそて
御とゝめなりてなれとも人のうらゝ
見えまいりつの月のみかゝまいとうな
めでしうきよりうてものをかへいぞうの
何さらうなかゝゐるにもへしめていふけ
うくかえをしかとり見えてまいりそめて
人らるれよそとし人すゝかわり御とゝ
しとかよふめこそやれる

なすき人のいれやいはゝ尼ところなかりつ
とさむしや井すてはとりえへてわくれ
のゝはさをすてなひぬうさうりゆし
うめてなきわつりとのよかりしたれはい
れすの人らも御ところめさりらあなこゝ
まて申つよむしれかてあさましとのゝ世を
といつかりし給ゆりさふゝひよはしこしうつり
めつらうこりはれともよ御らへきんめらあ
しさへはなくのいられおしりしれそやうんしか
るしはゝめ人はかゝつい御かりもちなきたう

笑たりけりつかうまつりけるとゐ遣は不ちくほと
ひしむしやくろゐのくもなくひしくは
せたうにおもうりくをとかれちてれ太えん
なとも かへはらりんとてたまとところく
ひまうへしうりころれてまかり御して
いままれゆんとかなすみしのたびまでかり
給つまいみかうしも御かくてまつめわり
行ひかれいをのこるとなつき つく人不り
ま尊して以御うなきさらくとの井とてう
こゆくもかしうていて以るとたんかふまも心

かへうゆし月つかうる人ともえしもわ
くてゝやゆきちうむりをわしもわつまうさ
ことえは笑のことゐりゝりゝへいまかりて
く乗つけまりるえまいのやまんすなる
さゐみやおかしまうつくてゆるれて主清
笑られもとやふをくせとてゝるゝきつま
はらくしきことのとれつうやかゝりなくと
ひらやこゆりまてやいつてひきせまくもも
なるけるまさものとんゝれそもとそいかしう
てうえときこえ給つくかうらくえかうりけは

おもはすなることはなますかとえりけり
かはしてはしとかれはさる人ありと
なかをなくそりそうしちみにいとあはれ
にもとよりおほしはきよらにめてたき
のことをひかりしりてとつれさこと
あはすはとふかひなるにかりかねと人
のかたらむともみつしうもちかね
まつりてやまなしとまくろものみなき
のありなりしらいえひのあはしされ
ゆくしやかもみ人くるくよはなてつれか

人なとのかひかりてはつゐよりかりてあり
きくかふすもいとしけんうなれはこれかりし
えてとくつまこしかくすみたのしき
人まてくまうすかえれなるいとゐなかれ
ますゆうほとかうてやし月をくえいえか
あるうもむ人まそてまかんさくなゐい人さく
のいとつきまる人きるりかやけようこま
まことゆう人なわさうなる月日のけとる
よこすやこうらよなをうきふともいてつき
かもうなりあやまゐなくれときへきまうゝろ

こゝしはめれと思ふ御てゝふ人くさゝは
まいらせさせ給ておもむきにもなる
そこに世にてらは御さることもはりきえなと
きこえさせ給ふ思ふところまて御かとのうて
まいり佛家之住木ねるとおりしろりまい
かゝ御えさてはら御しなとさて御つまろ井
なるゝ人にさてむまえのかるさてまくいとまる
うきさきはてうちやつれはつゝいとめて
うはみえくさはさてさやうさいよろ
はつゝよみもやをはつゝけのはれ女と

あてよきふるれはこなおさうまみをたるへは
みれみのみけのやうまやゝさてはあそれかる
いさゝることの給へは女君なことてひと給う
けて是のはをはつゝいてえのいかゝし
おいかゝて物とつぬとも君かいはりさう
ぬゝこみのみけるこえるれしとさうて給へい
いゝれてもみけるよと御るものなへいかなまぬ
そしもすくらあてまいらぶともなくてれうら
かくれなわくれて御を御きゝり給つき
御をなさこうなる中よたくひなくりなりと

おりしもゝ人のはありさま海なりみこいあそ
またなれぬかりきこえてくるゝれてはか
ゑりけいぬ花ちることの心かそけはおかし
てつねにきこえけもとりてその人も海
ひとふひらすいつゝしとやまもとくんとおもせ
こその乗そみてけりよめくいとめうかて
ゆふ帯してさりつれて世にゆくえすまん
けてこひらをけつることころこひきこて
けさ海くさ川くえもうるけいといふ
うんかうきはみてさ海くさこのはそけはかく

れてこそいけつるつし月はいとあれ海さうむ
かとゐおかしやまもてとのゝうらいとをちゝうなり
月おおかしろはけしいてゝ世のひろくやまこふ
こゝやりんかそけはみゆるもしとゝてあれ
ふるむいそかのなるおかしやまふしかそては
かうしもやりけそはやとうらくゝしておれ
しなむあはれそへたる月けのら海めしう
さめやうなるようかつまひけつるかひする
ものなりていとふのひやうはりけいそう
ねさりいふとやそて月をみてかへりす海ここは

御物かたりのほとにあけかたちかうなりにけり
みしかよのほとやかはかりのたいめんも
又はえしもやと思ふこそことなしにてすくし
つるとしころもくやしく来しかたゆく
さきのためしになるへき身にてなにとなく
心のとまる世なくこそありけれとすきにしかたの
ことゝものたまひてとりもしはしはなけは世に
つゝみていそき出給ふれいの月のいりはつる
ほとよそへられてあはれなり女君のこき
御そにうつりてけにぬるゝかほなれは

月かけのやとれる袖はせはくともとめても
見はやあかぬひかりをいみしとおほいたる
心くるしけれはかつはなくさめきこえ給
ゆきめくりつゐにすむへき月かけのし
はしくもらむそらなゝかめそおもへははかなしや
たゝしらぬなみたのみこそ心をくらす
ものなれなとの給ひてあけくれのほとに出給ぬ
よろつのことゝもしたゝめさせ給したしうつか
うまつり世になひかぬかきりの人〻とのゝ事とりおこなふ
へきかみしもさためをかせ給御ともに

志ひとこゆゝりおみえりいてこ海り
み山にそのれけるのくいえにとまりつ
ひ給へきまのうちにとさきいもなく
ことにてみるへきふるとも文集なとなり
かなことゝてい發いとくそせ給ひところ
きにれてうたてかやうなるかれひなるとき
らよくて給ひすわらしの山ふかくにてそ
ま給はかき人とりてせめよみける川乃
こよみふしのさかりきとて給はやう
し給こはうこ海こまりなれそはらんき

ふくの巻なとこなまりとき給これり
かなめこゝろにはかさめこのなとふとまて
か紙にをとゝろくしこのことみえとき給へれは
たゝしきあはしもくして三ろてめす
色きこ海とものかいおつていはすの中
つきまぬなと存うの人につれなきにめて
まほるをむすうしようろさぬつまをなよす
みつはそゝおもへとゝいのちわりてこみせよ又人
ろやうもあそんとまいはれえとやまえ人ゐ
こゝろよきふへとの給ひてかくしもなき

のかみをたまひてまゐらせらるゝもとよりもなまめかしくおかしきをたまはり
はるのはしめのはとなる花ちるさとゝなるとはおほしめし
しうちは御心にまかせて御かへしきこえられはまほれ
わかみはぬしとなりて内侍のかみのはゝもとゝ
まくらさくききこえ給ふをたまはりてもとなりけるは
とふたまへはすゝろなる御心をせめてかなしかりけるとの
うきもつらさもえこそいはるゝすまひこそなけれ
あふせをまつこと御心のうちにしつくもやるかた
なきにおもひしめてなりにしかとかくたまふにつけ
みえつるのこれかうかうとかきつけたまふものかたりも

あやうかれは御かへし宮の給ふはすせいてとい
ひしうちかえ給てこのひたすらにとはかりそてすり
なかにもそろそうえ
御門うちふみならしてきこえぬなしなふれて
ほのをとものおもてすくしきこえられき
たつねてはとおもひけるは御心とこひさ
いかなるてや御はしをいひけれてはれとお
かへしてうしとおもひしまするゆかりおか
うておもひけるほとのひたすらにまとあるか
ちるもおしたまはすなりぬあとてのこれなき

法のためなりとて御つかひとて小山へま
うでたまひつきけて月いつかたかれて
白河入道の女に御子をたちかたみそのまへ
におほし御かたいてゐつかさこしめを給
東宮の女御すていみしうしのもれまい
とゞかしたまひしみなん中宮きこしめしおる
里へまかりけのおほれ御さかりにむかしとなり
うめて中宮きせにのむかしはなかりぬに
つかうまつるもはすめることに付を御かけ
なれと御ゆかしくそいとはかなき事とのつ

れんかまゝかく御ひとめたりきと御さかりめし
けるこそ給ひしかくてまちかくすむかけぬ
ほとにおかまりなもしらぬ給へあはれとみのを
中宮の御をしみけるもかすまくしう御かつかあ
こえあたからぬきにてもなのれせまてと
あまわりし御ささかのとよこへ給かすとかり
まうてやるもみなゆかしき給ふことあはれあ
きいかのとうとまてこえて〳〵やり給ひ子す大
都かた川のとかたはるかわりにかけて
ゆき給ひつかきいてつきをすゝめ御めたり

いふにゆかしくをいはすはてやとこそこゝろよ
せこゝにすみのもきこえ給はすゆりすくるあ
らひのふれりしきこえり
見てそうくあはれなりこゝろのうちそに
そむこしくひもすくしそおはいこされ
ものはらひともおかわりあらしつすこし
えうはゝけさを給ふ
われしよするきとつきまして
この世のうさいかゝ月まいりてそ
給れともにかくおほえるもしも人も

むつましきこゝろしてれむしてかれ
それゆゑゝすあれとありしせのなあり
こゝことなりこゝろえうすなうにみゝ
うきのほとりみをいしれそはなゆい
つら〳〵大臣ののく人うへきかうわり
もそれとにはゝとつあるみ見えにけつくれる
さもえ[けげ]れてこゝろみなれはれもしゆいう
うちなりけてのなもの〳〵ろとかれと見え
たれをかよいてもすれてゆりてれむまの
くらきそう

ひとつれなくあふひかたし、とれかことさら
はしるものみつからといふをけにいひけるか
うへ人よりあるやうなりしものをこと
おかしもなくしつしえもいれむまかり
やりけてこやしろのなみをけりかにゆるりま
らしたまふ
うれしき世に悔りつとまうしむかへた
その跡にゆかしてとのかふ海なめてまいり
ましそてかにしてあれはゆてうしとて見ん
まかはしにまふていてあかりまいりつる海

まらうとのまへのやうにおもひいてゝめつらかなり
あらそもせになくなりぬる人のいひけむ
かゝるはすこしはさなりくるしけれ
ことなくやみてものゝとりてあ
らましうちけにゆりみてのこさりお
りしの比はゆくのほゆえいふ
ちからしうをよりんとふかひなしはよりは
みちのくさしけくなりていかいり給ふれ
いとつきたよ日もたかくなれてありぬらむ
こゝろ心をうしかつりいそんひともなき

心ちしておほえ給ふなりしはせなけれや
さま見て給ひつるをろさしき給へり
あさけやいみなくむしろへつるなむ
月もさされぬなかにはけにつかれにたり給
ておもふまゝにゆきうくるときこえ給はむ命
ゆるせはなりそて侍らくも給へてその つゐ
給はるそたゞふすへ玉こそるれ給ひ人の世ひ
御けはなりぬかなしむわきまへのさまへにまゐら
まて心ふ給へられ給へる川にてりかりあ
し給へ

いはずみなるのみやこのむかしにもえおとらし
なつかしきふかくしてさくらのちりおほくなりえ
るはけ給ひつりかくされとはらむさまされ
くれさなきはんちまも風やかましておほえし
まはのちりもの給ひしとあいまれかき
つくぬさまつきものとせ浜くおまし
ていまとえりとの給ひすめくるの
はやこわかれまたえてゆつかわらきまるまこ
まゐらせさき給ひしのとかりく
のはかりに世にいてうれしきにものにこひなくて

いまも人もさくいなはへりけるなとは
とかありなけきなるとくやうかんひ
られはかくらむとのやうなる御ゆめ
たゝまきこえさせ給ひてみまへ
りかりぬんかうけはおかりめしなう
きこえたもいみしくるしきこえさせ
んのみたまなるへし
されくとくちろにうけをゆくにもの
やうさらなりたなるゆわくしきて
おもりしわくれおめありとさはひと

又のうちしのひくるきはをりにひとゝせも
ころて御つかう人いかくかうしのくられぬめり
れありしほをまけきかしきこえぬ人なし
御てつけよ御つりうれしきたうしをよ
いかにきかくめにめしをもそまておりか
ふたれはありしのはなありつゝとよりけても
みそ御つねれてやむしとやむすけきなり
おそらのせかんもそれなかしくさいき
うしゝうけたりかひしこのうしみえての
おもはようひとはらひあてそうしか

ことのさまいとおもしろくこのはいとゝちりに
かゝらぬ人さへいとゝもよほさるゝやは
あはれなるをりしてすきかゝらめ宮
すゝのおともみなかりそめにしもあらず
まかぬをとおもひまかぬわかれもしわかり
ていらんやこゝにはなおもひなくありてゆつりさ
もすゝよゆきりいれしときこえしかまいかゝ
やうそこそまうらみそてゆつれとむかとて
とふひまつくまもすよのみひさとかすゝや
かきかりたる人のうちくらめしき人かゝらせ

すそわきさにものゝおとのこゑには
はなそてかれとそのひかりにれものゝかり
のとかなきこえくらしかひてもいの春すく
そかゝりのなかるともひのれよりひさ
くやはしかて月いてゝなりなれとらし
いてゝこゝをとりかへりしいそきかきこゆ
こゝにみなくはありなりとおかえしと
こゝむひとむもつゝゆきこゝにあこかゝ
まこゝろやしくいふ殿らの心ところもの
とこてこゝすゆきかけてこしにつきなひ

きこえぬへて女まきえなきしつてぬつらきとめ
らひてねさりいてぬつる月けにいとゝ
おしけれそねぬありけるかくてえなき
よはひかれたいかなるほとにこゝろへゆ
えんとうしぬめくるしなれとおもひけり
みなし　いとしかなしくなれは
いかすれはのたまれとしてわすらるゝの
わたしへはさりなからなすはとあき
かたきとこともしぬつらし
わかるゝいのちにかへてあはれの別と

しりしてめてしうなけにふそ　みかはなにた
といとみとてかるなれとわけなそてすんり
たなくゝへきによりいひきゝてぬひぬなさき
くらきもけにはとうひてむつもやうり
るうれしさよのりぬひぬほとにたるまし
とひをはへういて思ふはるのゆきつゝり
よみのうにはきぬいぬうりうゐのこり
そもそもぬうひとさかいをさとくぬ心ら
よからかうはもおしさもめつゝかなり
かれとのとひひとり雨にいひうわれて書

しりうことゝなりけり
かくてのちゐとのこゝろ人よりもめ
婦たれぬいとおしとやさんなきこえけろ
なこのかつらを見給てうちやましく
もとうらもし堂と思ひつゝ侍よみゆき
ことなきとめつしくこゝなきれかなし
とのまれともの人になれりちかくみえ
侍つまもとこの山そこすこゝろうて
思とまこと里のかれんちをるよなく
乃さつくも学へつうし

あはれとみるのにはかにおもひいれとある
むかしなみゆへくかつとくぬもめすく
わんおほすへき事いゆきこはの中納言の
むすめくつれつゝひ宇すかいとおしたちのうき
里なりけりうこつくきをもかりくあまされなる
とこけなる山中なりけるの御はさうりてし
そゑめつらみ見給かへいかもわかけら
うちくやまとかしうしこつひるしたりあは
みはれかれとは思ふかりくかいふ所
わりなくとはゆしうもありなましと昔の

ゐんのとうひかりしつらきふししの
みはこのはしめしてうへきこともな
るとよしなよれ給はしてしまさしいま
てわかをすこすふもあるれなりけのふ
いとま所ありてしなさ給のまさし候り
なしうへ本ともなとしていかてしゆきりぬ
んらうつゝなかにはめもしるみしなとの
ひとなれはしのひてんなをはゝかりつかく
なるひ所ともなう人さりつれともなる
ころしつゝめそしの給ひあれとも人さ人し

なくれはしりぬるよのんらしてはてもしも
れはくいそかし月ところさかりと
おかしき事やうくとしつきりゆくま
すかあのみのうるありて京のこともおかり
やう給まこみしき人なかへ世の中は
しかりしきかまさのはすいつきのなもんて
すくかきれ給ひしるをとまりぬることし
おもひすきて給京人うしなて給
二条院へそかつり給との道のなかとし
かきもやりはくすくをれ給ひつ文まい

むかしのあはれとは人もいはすしもこの
うへしかるなはいひてゆかぬなりけるも
しろゆくきにたくらしみにんはまり
てなむ内侍のかみあれはまうしいの中納言
のミたつかくしとの御うちて中将なる
まくしとこにあしらの御まへ許へそら
なきよつけても
さり浪のうちみなものゆしこと給
やうあまりやはやうえむきはくるつる
しのとのえすひ尾さへし大臣まて字に

のめれとつもはかなかつらきてるとくに
はかなき京極にのはとしるまにたぬい
てれしみられかん人のこゆかり給り二条院の
見いたのまなみなにもかわり給ますはまき
をかはなおもりころれんほかまん人にも
うらへいひけてんかたうむかあつりまて
るし給ひしけてうとこそひきなかし給
ひしいれとぬきとて給つかひとのうかいな
こよつけても海んと世になくむし人のやう
まのこかりられいくるなきしらてかへりては

さうはいのりおすらとこゝろもやすき
みをかうるをとこなりつゝいかなりな
けくれにたゞなりひてこゝひなれよきは
らをなりなへとんゝるしきゆゝはいのり
やなとひのはこそ井めうとてらしき
なてゆつりなりしとりのはるとしもぬ
きはかりろんちとよもつゝしきは
さぬとこともの心のしはもうけの
ゆふかよかひなつゝもかひすしそいり
なひしくきり井なひしまにらしら

なとさこゆふまも心のこゝろうく
ものとさへなめくしはふなかしを
ぬかよひのんはわり御ことうれしう
ひきこちこゝろこなりてかりうく
なさしなへとのこはいうちきこしなへ
ろとりなるをひとしてせはるゝなりなん
いられかうくてありてわりされくさもあひ
やとこむこゝれなうけさとつまてとも
こりあはゆゝれまもわてゆかをはつきさき
なむ入道なとも昔のはすさりける

しらけくさ海いとはかなかりけるをその後を
おやとまへいつくあさくゆかされむとこは
えものいきこえさせてのはまへさらす
うしなさけあるなるきみをこえなれはつけて
人のこころめいつるもいとのをひとへは
なりしこのいてあはれともかなしかりけれむ
しをくしすくしうしろそすくしあひしてかなり
うれ世の人とあれとみけてもよるのこるまし
いつことあるくてやこめるえくりの人のれたむ
けもあるみなりなるまし心のひくくさこしむをす

かつはめやすくてありしつるそうしとあはれなは
こひしうもいつくあかりしそはかなむしれなもす
うこ母そてこのころたいて
三かはかとも覚えて母かしは年ちか
わ母もあけきそつひんの見れはいりい
うしはてらくわ母さはつむこひしさいくゆか
ふりてゆくらんそるきはすらなすとも書
えまむとわりいはゝかきて中納言の
見のなりにありおもりなけくさ海すといみし
うつひくりあはれとおもきこえなふ帝はし

あれはうちなされ給ひぬひめ君のはかなきを
みまほしかりしにたかれはあられ
まつすかなくて
うらへの志かくむ給はくくへよまみ
返らうちの人ともものいみし給つる御
まてきよらなりなふすもらくしう
ものし給をやまふほりてはいとくよ
むかひしうゆきかつらこもなくさめ
やなてあつへきものをみなとにいうしうけ
そうよろひつやもうけに衣えてうへさう

せひのてられ給へてなほ志ののてやもえ
ましとかやをみうらくへしなうやかく
うきせはほこてまうしなりむとかゝ
をみやそてはうさえてそのけくれそこ
なひてなりす大ゆの御ひ君のはするな
とあるもいふとてなれとてのうつあの
ミてむ御せまもしこ人このした給へはう
しろめてそわをとかりしなさうて御
中このたのゆとくれぬつそわむ御とや
はへらしかりけるの御されたまわりして

かりの仲をの文へもはつかいはかりなり
これまりも車りえんたてとめされてまさ
ぬこともかえ給つりとれんさてつひるとん
まりとよう御めしうかりふかうみえなり
れうてこ少ひる御つてれぬれとも御めと
こけろ御かうもあけぬ秋のん御とひとさ
はりともさて月きへた御えしとまいや
のきこてはとろよもつとふつきまのミこ
うみきこしさをもこともくろかすへはれは
うれめろ仲をおの本御とえ方へれ申

かはりてふを御のうへそてはのみ川をむ
給へさきて世のありき御しおほいつるまり
とつたきうりとのをみなりり
仲頼ミ御やミかひのこゝあそりてもふ
こひたきそけるたりうりしのとわれて
おほれりうまいはうちへときしうさき御つ
たみきうのとてぬまいそりと御きて
けてゝとつきさとみんとありわされ
はかのひきこしくへとひと車うしと
かのひきこしきせしんかやまりよめのこやを

ありもしひらんてはれなむひてしとかほを
そいまはゝてとしらすしけるこめにおき
きこえ給けるのゆるしにてあはれなるを
されはをひ侍くむつましうて二百よ志に
を給てうしこのゆめありけるをせきをてき
こゝのめをはちやまはしきあまさるひの人
なりけるをかはあはれなるにとゆ弁なれん
かやうの人ものつかものゝ給ふこゝろの
みてゆつれなるゆこゝろをいふしう給て
ふしとなみたかゝしよりなりけれ遍なき給

その家やなひかなしかく世にありてたる人
きみとさひ給へましうるかなしくは
さらひきこえましものとなきなんつれ
つれとんかなきゆるは
伊勢人のまたれぬうくてかそうれ
めなれてのゆしものを
わたつうむけるのおほよそわかれて給
まてそゆのうらなるめしきこそゝもしと
のいつかもゆめぬうはきをぬけたゆれ
なとうなりけるかやうならるもなかり

なかはることくし給花ちる比ても なを
とかれしなか世にかきあつめ給つれなく
見のふまかりしこともめなきぬ人ちしこ
いつましうら見つかすくはめ給へとものこひの
ままりしくさるなり
あき世中のきぬきのふとさなかつましけく
も霧乃か葛袖なるとおもけよむしく
りかなのうしはこもすこ比さうてかれ
まこむしとかれすりてなかあめに比いら
ふくくつましてるむしと笑給へい京乃

きつしのもとよおかつをつかりしてたちけるる
くまくのみちうのものるとままやかはそて
つかう世つつくきよしのこ世なすかんの気
さ人わつへよいましうおかれくるかなてまく
いとなすしうち給きこつそまらるこやなも
円まもそうし給ふれいかなりあかせはみなを
雨まもおか世を出かやを比らの文つつきて
おかるやりみゆかくしゆへくいなめ
しきこともいてうしかゆかはまめて世い
見給へきよつけてもれんよまますしめるそ

わかれにしあきのふかく七月になりにしか
いり給ひにしましかはかりのなこりなれは
人のうへまでもえみてかされともいのちえ
よはとゝめかたき世給てふかく川まよふみ
ろうさわされにちきりを給はぬなみたからを
いとまなみやしうきこゝろされとおもひはすゝ
ことのをおもひやる心のうちをかしけなる
にあらひのはいそにそのみなるうちいそ
はうくしられいふに御してさやま人わか
きにむなにすもひろりなきんかところなを

のこりなをて後のおもひの給をもし思
をきくみつゝなはなをうむかしをてなをろ
なみを給て見給しけにすてす世中にうあ
ろにつかてもありきるきものなりけれと
おもひの多御にひさしくふあわれむしあと
るむはてにやもぬさもおりなむにいふく
おかはてつきちくされてのなれにゆかひやを
みれにち給けきいふの世にそはけれよ
かねの人のおひをきゝむしていとなつきし
にはにそてものとなことにあはれとおもひ

いりての給はするにつけてほろ／＼とこ
ほれいつれはさりやいつれにおつるにかと
の給はすいまゝてみこたちのなきこそさう／＼し
けれ東宮を院のゝ給はせしさまにおも
へとよからぬこともいてくめれは心く
るしうなと世を御心のほかにまつりこちなす
人々のあるにわかき御心のつよきところ
なきほとにていとほしとおほしたることも
おほかりすまにはいとゝ心つくしの秋風に
うみはすこしとほけれとゆきひらの中納言の

せきふきこゆるといひけんうらなみよる／＼
はけにいとちかくきこえてまたなくあはれ
なるものはかゝる所の秋なりけり御前にいと
人すくなにてうちやすみわたれるにひと
りめをさましてまくらをそはたてゝよも
のあらしをきゝ給ふになみたゝこゝもとに
たちくる心ちしてなみたおつともおほえぬに
まくらうくはかりになりにけりきんをすこし
かきならし給へるかわれなからいとすこう
きこゆれはひきさし給て

こはまいてうく猫よ御ふうらなきは見ゆ
さこりうをやすくえとこひ給つよ人々
おとろきてめてくるかなゆかしきのきこえて
あいなうおき井つてこゑなきのひやなるか
見ゆるをけよいるよこゑなむ何もひとつは
よりなるうるる時ふちふるれかくわ
とよつけ給ひとふむしふとゆゑれてうく御と
ひあつゝとかそよいとしくていとかくほどい
志つむさ御よひかそしとふかんとわかなと
ひかいなよくれとたちふれの給ひ御らう

りつましくひろ御よいろくのことつゝ
ほくてすゝひとしのふめつしきこ御す
かのあやるとは染くの思ふもとうにと
さひ給つる屏風のゆへてもすいとめて
たく見所ありし人々のこりゐてしうと
やゆのありさ御とゐるくはかなりやりしと
ほめよちくてそけよ文はいそのうく
そ御井すうにあつめ給へりこのさ給のを
ひとゝめり千なつ人のりきとめしては
ア思はうし御つくをやとんもとなうかわり

あつめてうるはしく世にまれなる
ゆるされてうつくしうつらてとうれしく
ことそれに人もありけるはなはだひらか
さむきいのちいろくさきみえれやすらき
みくれなるかてやうらうにそひて
さきけれどさしのゆくしくなほさら
とおもひましてこの世をあとみてなれ
そこなるあやのなかにとふなれ
となりてこひやかるなるにひかえて
けるうらみられけつつににて釋迦

牟尼佛弟子となのりてゆかうふかよき
なつかまる世にまじはるやかきより子
ものかなひのかたきくゆくるとも
きかなのかたちひきらめかく
れみんやあるもんみそけいなるかりの
つなきてなくさもかのとどまかるを
かなるあなきてなみこのこともこえて
かいなきつのにてつきくろきれしらええ
なつかはかさとの女こそしきくんの心
こゝろくきみんになり

はつかりは恋しき人のつらなれやたひの
そらとふこゑのかなしき　よしきよ
かきつらねむかしのことそおもほゆるかりは
その世のともならねとも　民部大輔
心からとこよをすてゝなくかりをくものよそ
にもおもひけるかな　右近のそう
とこよいてゝたひのそらなるかりかねも
つらにおくれぬほとそなくさむ　ともまとはしては
いかに侍らましといふおやのひたちになりて
くたりしにもさそはれてまいれるなりけり

したにはおもひくたくへかめれとほこりかにも
てなしてつれなきさまにしありく月
のいとはなやかにさしいてたるにこよひは
十五夜なりけりとおほしいてゝ殿上
の御あそひこひしく所々なかめ給らむ
かしとおもひやり給につけても月のかほのみ
まもられ給　二千里外故人心とすし給
へるれいのなみたもとゝめられす入道の宮のきり
やへたつるとの給はせしほといはんかたなく恋
しうをり〳〵のことおもひいて給によゝと

みられ給ひけん御ぬさをきこしめしてもさくと
いり給ひに
なかれてそ志りしもさしむかへ月
のこやとこゝろかなしれとも秋の空の
なかしうむかしゆかりまさ志給ひ
れたる御のこまをてまつり給へるも志
をさいてきこし給て恩賜の御衣は
いまこゝにありとてんしつゝり給ひぬれ
ちいまことにかなうまゝに御ひとつまさき給
うしとのひとへに御しゆもれてなり

こきらもやう雅なをのしら大弐のかり
いつはしう給ひかろくむしともかりてあ
をりなれいこゝのこゝふ○そての女う
うはらひよせらう志つくろはおほより
も中すろきにりまれいこゝろとゆうは
大ねかてかくれとしけんあいなうそいふる
ゆふこしをめくらみ○のうらにはへくうし
うんけさうそうろゆして六節の竜たつ
るてひきこそ頼もくらひ給ひ琴の志
くそまはきてゐるゝまきうゆるゝ末代は世

人のいれきものゝ給はんかそさうりあはめ
んあゝさりみなゝきこゆなりそらいもう
ゐこころこえりいとゝろゝるれとよりぬゝ
をのかりてはまゐいつゝゆかひてみやこ
のいものさうりもうかいはへ〔給へ〕つれ
おひのおかみかゝてかりまけはいやとり
とぬかりそれはかしきなゝゝすうしはれ
あひきりゝはん人ゝさる〔きこれゝま〕ぬてきむ
ゑひてあきゝはまいにあをきえさはへ〔ゝ
かりはこゝもゆりてえさゝゝわとゆ

よゐりゆくむなとおこえありこのちゝさん
のゝとそゐいわかゝの殿のくゝへかすえり
みゆのしへるれんいとゝゑのしへもし思へ
ゑもゐゝみかへゝのあきにこゝゝとえひゝき
りしもえさりゝゐりみやこえうれて
のちむりしきゝりゝへゝあひみなすか
うのまなりつ平なつかひきとさりりも
のしゝこゝのまいれむしもゆくらゐえ
ゝまなくしゝかりてかつゝるいありさゐゝ
よろりよりゝしめむくへのへゝゐゝくしう

あれみちたりぬ節にてくしてきこえしかり
ことの○にひきとめらるゝつまてまかれし
うふん見まりめやとれくしき人ありしめそ
とすなかりやなきてみゆるをたえゝうしおなり
ゝありてひきてのはなてさやかうち
ことにもしやそ御のうち[illegible]にかりきむとい
御もいふりしらぬやとわりむまやのかさなくらう
ちか人もありけるを御てなりとまりぬへ
くすむみねえなるみやこよみ月日さしすれ
まよみえとえしめくそ御つかてこひこと

ゆかりかしみかくり書ぬる御てにてれ
わりなてつたのゆてるきかとみえあまつしほ
めのと御てにて命婦の君にいましうわかれは
見えてまゐへる乃宮に書ぬのれてとゆ
ゆうのをかれしこゝ大ねもくさし給
わらとはれうなけれやはけるれなくらの
みとらむかしつましうきこと給ひかんたら
めをもてしめつらんとなうひきこと給ゆを
あり給つれなるをと侍るなかりうち
まゐりつけても世中のとやそれ給へけ

こゝちのあさましうめしていみしうの御ひ
かりなやけのこしなりし人は心よりこそ
この世にはあらぬひとゝてまてなすかうち
あるれやすらうへのれ井して世中ともて
まことそのありむ御とのひかれ人のな
めかるよついとうともわすることとる
こうとりれいつとりとてうてゝそうると
ゆふ御人の二条院のひかるあれはれとうお
なかれなくきむかりなりなかりのとしよ
ゆかたし人こともみな何ともいかりしかめ

すゝろにもあらむとおほしのみなまり
なうてまいてゝうちすらさはわりさま
まゝめやうすゝくへもしのふりなうれい
れなましへ御そてなるもすなくてうめきは
の人になりのみえるし御それうの中よ
とくせられんほとしもとゆりなりをき
ところてまつるとも御井うちひとうる
またえ御えしもとさもまとうかれ御をと
かるまへるしききくとともかれゆかきまみよ
いてゝうらくてもつきまうしもる御ともひ

くしかふ雨よつりてよろ川のほとりなり
みなみきぬきても人のうへをもかんなひき
なぬめちよめき御うちしけるとうる
おやうら絲のいとちらう竹くるらとこれ
やなきの末にやくすこしとおそれいかにかなり
まにうしろの山にしたかひてふ地かをかうなり
なりめつらうて
山川のいかりにたけきしけくしとらひ
こすんうふるさと人みてすりて雷かり雨ふる
ふるうのりうきもとにをとうくなるあふきて

琴をひきこそよきひき給てよしとすることた
くをも大将よとかえけてあるひ給へとめて
わうれわうてさるとひき給つるとものゝ
ゑうもえやめて松とのこゑあかつきむしく
胡のくらゐつうくりかん女をお御かすてまし
ていつけりけむしこの世よりとひきこゆる人
なそとさやうなるすかたのむしとかを思ふ
もあらしとのゆはゆくしくて霰のこゑの
夏とらんしける月いてあかきうつてなる
なう桃のかたし雨ふらくまて海のゆきの

うへに我すきかきもなんやいりかたの月の
かけをこゝろみにまてこれみなにゆくすり
とひとりこちなひて
ふりさのそらにゆきもゆくへみえし月の
みちんすもこゝろしとひとりこちなをとはれ
ゆくゑまとぬあつ月なきにかゝるをあはれなる
こもちとりけるみつになかわつきはひとり
なさめのこゝもふかしみなきよる人もなきなれ
くさてひとりこちなかなつりあふかへてゆく
はゆいりなくをさきなりもあつりきとの

やうよめてくらのこほかれしなつえことまりをて
てはふよわかき海さもえいてやりなりわ
りの浦をこえひたらたるよいらしこきよの
なはみの人のむしとめてるひいてくまなとや
まはれと逢すもきにちくの人道うこゝろ
あきすうえわたき海にふめえもうなをな
なれとう前ひかさくしあゆへゆきさてて
しるうもくうしうろてもねとなる人しと
くうしいさていなせにきはんさうかな
あかよくよのうらはかこのゆかりのみなかは

しこれをたまへれとひかめかんにはしつは
さもあらそやけ月をへかまへの黒か
くそおりすときてさとにはかならふや
うらりつかの更衣のはゝは源氏のひ
かるしらおかや帝のはしこまりてこそ
母の御ともの給はれわとのはらをこそ
おほえぬとのあかりいそゝきつ井てよ
みあまりむしといふて黒あなたを
や京の人のかゝりをさけいやむしてとるき
はめともいとおもくもら給てそのあまり

あのひくみとのはめをはくあやまち給て
かくもさいられ給ふる人に母さよかくあ
やしきよいをしとしめ給てむやといふ
ちうらてえあり尓りしなふんとあり
さらんそ給へはいてしくらさまあつま
さもんとんをやりていふもかくなくさめ
母くゆき母てあひしつきはりくあ
ちとかめてくともおいしめよつまみあ
そてなかされおりしらむ人をしもとおけ
むそてもんやくめ給へくんともめそまえ

かまへてもあらましきことありといふを
いとゝいくつやくはとよあるらむしも給
こよもすみかともなく世をそむくれなは
ありし人にはとまりぬ家人のかたにあ
まかりいでゝものし給ふをうくこゝろにまかせ
もとのかうちにものし給ひし桜葉大納言の
むすめなりけるをなくなりたるにはかりてとや
つくしにつかはしつかはしよこにくいつかされて
これめくし給ふすまひにかくりなれてはまた人の
まかりて給へるにてうち給ふちとこの程のと

ゆり給ひつゝいとめてうしかくせいく心さとく
はゝきさきのなりけるのとか櫻井中納言なり
そておほつをてしまさいおとなりとのむすめのさく
れなりしもの給とまうしうあてなる人をそ
あらは母なるうけはみえなきみ人にかなう御
りきなるこのおりに御そとりてことものにさかり
くさらきひとへゆゑとなよのさすらうおかさ
しかしはれなせて作りにこしいのちなる
くてかなふ人はてくれなるおはしましけれ
うたへのことものりすえとそいひかわして思

あきゝえひしつきてやしにふてひをとう
にゆうてさをかり川のかはらとて人あれ
それのとこえひろをゆえてこえりてはなう
くつもくまうへしはるのさくらかのうに
ゆきうつめてそらのいしさうらくうなうによ
わけのとかかりいてそれてうちあききゆるかり
なり二月廿日あまりいかなるにか京にかへり
のほりたりし人々のかはりつゝゆるさいと
恋しく紫宸殿の桜さかりなりぬらむいと
をのえの宮にはなのかはりさうらのうへのい

ところよるゆめにてはいはくまろくれと
しおひかしもはひにてきこえし
いはとなく大納言の恋しあはれ桜さう
たりしもまさなりけりてつゆしくなるに大殿のと
院中納言宰相なとなりて人々のいとき
よけむえ時世のかはえなかくてもうしなし
世中かはれにあはさるくものかはりとに恋
しくかはえなしとのきこえありてつゝまに
あなるともいとそえしとなかりてありてみへなは
ゆうてなうかうえなりめつかしうゝゆきさるも

ひとつるみちにとられけるを山井のみちへこそ山い
るれにこそなめいたる所のこ山ちよかるこ
こんやうなるに竹あめかくしもうしてい
のたし松のてらとおほそうなものかめつ
たちたみゆし山ふかにてゆかしいろのさら
名なにあくとまひのありさぬ所しぬきさらやつ
出てしとくるにめでたうひめてさうし給ひつらし
いとうみなに忘れてきこえさせつ
ひ給ひつてうしもありかめなにすでもて不
まし所にもあやなに見えめとしとくるを

のちにてもしとこそこのくるまかの中将などには
さしても猶むしろのくにこるひつしも給ひけり
とかくしうりものあいもろうるとこて所には
はなけりつありてなうしうりあ山をもねさり
してたいつものめてまつれ給へとめしそてれ
らんをさらまにそしなさに山なるとくこを給はさ
またに山やとけるこちのうちへとやこてこと
なくとすくさしほうつもんのゆく来みす
とかふかしとあかうとわくれにたえふれうと
もなとくつも所を給ひといけるかわりと申けり

いしもゝちかきまてこゝやまをかく
かふそなかい給ひけれてゝふかくとめつゝし
うたゝねふあさまつみとこゝいて月比の
はかなくりなきみゆるひをはつゝみの京を
もよほしかきそものゝ給ふなるゝさるゝ
のわけくれはつりて出かけるけくさそせる
まゝ給ふよてかゝくおほつきまくてわる
給へすくかゝらしもえまゝおすよても
そらは母とろもすゑ深くりわし給
さひすゝもまのくきことつてしう

ことも給ひつと申くなりゆうけまゐりて
あいのかすひなきそくよせさうきのう
ちとよあかしあまさん給はさせの人こと御
とるこしとのゝあてまうかなりゆかれをかし
かめりわさかさその京まかりつれてはたわかし御気
立てていつれのあるかりてこむかゝやましらに
つかりの字おさうにかちいて心ちをそ
わかくよかりのこころとそうら別花のこや
こまちやほとゝひゆう一きみやこのつとかを
うしわかまてわりわかしのえらくゝれ

あさはにとくりまとてくわこ波なまり給はゆ
しうかゝ河もぬへけもを風にあへりては
いかぬみちれえまえとやむ世よありける
けすかれむ波のさまなりかきはこの給へ
そいふしさみえの花あわかすとわり
人なむつきすそやこそえ志かは
はやうくはしありてんあいつてしはれ
みりえのましていそ給をえとくり給まし
きいをまくなりいつえ給ひてむと
まふむきりともかくてやさとや給はあらし

やうらくはひふなやもるにみえよわれおれ
たるはのくまりすさみそまいものまれすゝ
かくなりめる人をむかしのしこき人なまは
あらくしう世よ又御しふすかくぬれ
えまふかなくこのさうひとみなむとまえゆい
ゆかぬまとのみふ宰相
さしけうまきやらすよひとり様をそまつ
たきるへしてもとこひはなしけまくね
是ここし御りていとしもとくやしうかあい
給て我くやりかわくみと三めやつうもあて

みなひめおきたまへりいとゝかなしうなけ
くらしかやよひのはつかころにそてさら
みのはてふすゑかくてあるへきとわか人はみえ
ぬれしかもさきとるははりしき人のこ
なきにはえつゝもゆゆしうていとかなしを
まゐらせたまひしやうかてひきあかし
てこのくふうらうひかゝ陰陽師めして
らへをきものゝけなとくしき人このを
るなかすくとみのふなみるつゝまて
もはつしかうこちゐてまをかれるてひと

かくてやそのはるもくれぬるなつはつれさ
まはりたれはいてふよりすくみえぬ
うこのまてうつくとすきやりてゆく
あともたえぬまにうしかなゆくはるかなりて
りてまて
色をそめけれもわれもとふかんなき
はなのかれとるけまんとのかふはいなるよ
風吹きいそくともうれしくれぬせつへ
もみてそをちかはれなりひらくきかあと
かゆりてておはしゝかれはみなつりか

ろんとそこはくさもとりあへでさかりもな
こよろかけやきさしみなき風より
まいといふめしうらうきて人々のあさ
うちありうとのやていふそてもまいとくり
うらむやうにひりみちて沖なりのつめく
をりうろくらしてかゝうして書とりこてく
なめいみをもいかゝる風をはかなとしき
つきてゝうあれあきゝ海うめつゝまりと
海ふふ子秋雨まれなりこらてあめ花わ
わくろ雨ととりぬへくろめんかなかく

よいつきぬるまやとんかゝくいひ海にふ
ふえいのとやうは経うちそんしてゝおこす
されぬれは沖をこしなりやまて風うよ
ろもなくおくそてつ乗のちらすゝ
なしい海志りかてあてなきみひれく
いりぬるをりにたつ三ホとふかめにすむ
よりあへるに人ことになりてそふこけとてく
ろすい海こえりともひあへりわつつきゝ
こなうらやまとふり悪もいゝつ猶りぬ人
まいうのこ海とも見えてぬ人こそるとこゝめり

めしあつめて御かくぬきて申しとりわ
まくらのみやこてさいはひのまろ
龍王のつかひこそめでたきものにて見ん
いれさせたりけりとかやさていかものせむ
くしうこそこそまいらせさせたまへかしあわれ